

(1) 1991年8月20日

燎 原

第81号



「燎原」事務所 602 京都市上京区智恵光院竹屋町上ル 品角方 TEL 075-811-3265

## 「京都の民主運動史を語る会」総会

総会は六月二十一日(金)、京都教育センター三〇二号室で、午後二時より開かれました。石川の村中嘉明氏、大阪の羽原正一氏も含め、二十数名の出席で、湯浅貞夫氏の司会ですすめられました。細野代表の、故木村京太郎さんらによって始められたこの会も十年になつたが、むつかしく考えず、ザックバランに戦前、戦後の民主運動の経験や意見を交流するという方向を、今後も続けていただきたいとの挨拶があり、会員物故者への黙祷をささげました。

ついで湯浅氏より会務報告があり、会計報告(宮川氏)監査報告(浅川氏)のあと、若干の質疑応答のうえ、了承されました。つづいて三時～四時半まで、別項のように「社会主義の今日」をめぐつて、自由な意見の交流が行われました。あと隣室でビールで乾杯し会食しながら相互の懇親を深め午後五時過ぎ散会しました。会場では品角小文さんの油彩・水彩・水墨の小品十点が展示されました。

### 会務報告

#### 1 会の歴史と運営

本会は「一九八〇年代における京都地方の平和と民主主義の運動の歴史を調査研究し運動の発展に寄与すること」を目的に一九八〇年一月に創立され、ここに、十一年を経過しました。

会の事業は、(1) 定例集会 (2) 運動史の調査研究 (3) 資料収集と保存 (4) 会報「燎原」の発行 (5) その他必要なこと、です。

#### 2 役員体制と事務所

\* 代表者 初代(故)住谷悦治  
現在 細野武男

\* 発足当時のよびかけ人

(故)井垣次光 稲田達夫  
(故)井上喜代松 井上秀雄  
(故)齊藤英三(故)北牧孝三  
(故)木村京太郎 塩田庄兵衛  
(故)品角一郎(故)住谷悦治  
西村清三(故)細川三酉

世話人 稲田達夫 岡谷元治  
奥田修三 宮川和雄 品角小文  
堀江八郎 柴田好人 湯浅貞夫

会計 宮川和雄  
監査 浅川亨の各氏

\*事務所 品角小文方  
京都市上京区知恵光院通り  
竹屋町東入る

\*振替口座  
京都 6-15762  
宮川和雄方

京都市伏見区觀音寺町212  
宮川和雄方

#### 二、事業について

1 例会は当初、原則として月一回開催し、戦前戦後の運動史および時事問題をテーマに講師による講演、討論、交流を行ってきました。今日までに五四回に及んでいます。

2 機関誌発行は、当初月一回でしたが、今日では原則として二カ月に一回、八十号を数えています。

\*編集責任者は、木村京太郎、井垣次光、山田幸二、品角小文を経て、現在は奥田修三、湯浅貞夫で行っています。

\*一回発行につき(P8-12建)  
600-800部で

経費は 印刷 約四～五万円、  
発送、約四万円

3 総会は年に一回開いて来ましたが、一九八七年以降は、役員の病気や多忙、そして、それまで中心に活動していただいた木村、北牧、井垣、細川各氏らの入院や死去などにより、開かれ居ません。従って、ここ五年間程の経過を報告し、会計の承認を戴くため総会を招集したわけです。

〔会〕発足当初は、会費会員と賛助会員があり、労組団体、マスコミへ機関誌を送っていました。

	会員数	労組団体	会費納入数
1980			214 (40)
1983	421(116)	49 (8)	311 (84)
1985			282
1986			166
1991	415(109)	49 (8)	117

( ) 内は京都以外他府県

会費納入者は発足当初二二四名、八年には三二一名と増加しました。労組団体も含め四七〇名となります。しかし、長期滞納者が増えてきましたので、一九八四年頃、労組団体、大学図書館、研究所、マスコミなど本会の宣伝必要部分を除き相当な発送停止措置を行いましたが、その後、またふえて、現在は、会員、賛助会の区分けは充分では有りませんが、京都府下三六名、東京、大阪を始め他府県一〇九名、合計四一五名の会員と、団体等四九名をあわせて総計四六四名となります。会はこの人々に機関誌を送り、そのあと残りは、カンパや年賀広告を受けたところに送っています。

今後は、会費納入を促進する必要があります。

#### 四、今後の方針 1 活動の総括

現在、会は、機関誌「燎原」発行に必要な編集会議と、取材の為の聞きとりや座談会を開き運動資料を記録しています。また、会員の皆さんから「私の運動体験記」の募集、湾岸戦争に対する意見の発表、社会主義問題についての意見聴取などを実行しています。

これは、今日の激動する情勢のもと、一定の重要な役割を果し京都は勿論、全国の運動にも相当な影響をあたえ、会員の皆さんからも評価され喜ば

学図書館、研究所、マスコミなど本会の宣伝必要部分を除き相当な発送停止措置を行いましたが、その後、またふえて、現在は、会員、賛助会の区分けは充分では有りませんが、京都府下三六名、東京、大阪を始め他府県一〇九名、合計四一五名の会員と、団体等四九名をあわせて総計四六四名となります。会はこの人々に機関誌を送り、そのあと残りは、カンパや年賀広告を受けたところに送っています。

今後は、会費納入を促進する必要があります。

#### 2 今後の改善点

- (1) 例会の再開
- (2) 戦後史部分の発掘
- (3) 本誌主要記事の出版
- (4) 資料庫等の確保
- (5) 「会」創立十周年記念事業等の計画
- (6) 会員名簿の整理、会費納入の強化

います。

また、「燎原」の発送事務は編集部と事務局によって行っています。会費徴収や年賀広告、カンパ活動については、会計係と事務局で行っていますが、会員の転宅や移動などかなりあるため、機関誌の送りつけがうまくいく面もあり一部会員には御迷惑をかけています。

また、財政は、別途会計報告を行いますが、現在の所、一九九一年三月末を切りとして七六九、一五三円の残高となっています。

これは、例会が、開かれずにいましてから若干残高が高く、機関誌の発行は十分でない内容になっています。しかし、例会が開かれておらず、一部役員のみの活動になって居ることは、今後とも改善の要があります。尚、会員の皆さんに会費納入の状態を十分お知らせ出来ていないのも弱点の一つです。

## 「社会主義の今日」をめぐつて

総会の後半は「社会主義の今日」をめぐっての意見交流にあります。まず司会の奥田氏から感想が述べられ、各出席者の発言をとなっています。

これは、例会が、開かれずにいましてから若干残高が高く、機関誌の発行は十分でない内容になっています。しかし、例会が開かれておらず、一部役員のみの活動になって居ることは、今後とも改善の要があります。尚、会員の皆さんに会費納入の状態を十分お知らせ出来ていないのも弱点の一つです。

奥田修三氏 社会主義優等生となり整理したので、文責は一切編集部の奥田にあることをおことわりしておきます)

奥田修三氏 社会主義優等生とされてきた東独の消滅、ソ連、国名より社会主義をなくすということ、レニングラードの改名に市民過半数の賛成、エリツィンの資本主義復活の公言、帝政復活を公言するグループの誕生等々、また壊滅とさえいわれるソ連経済状態―中央集権官僚的指令的計画経済運営の破綻、公害環境問題の噴出等々、またバルト三国はじめ民族問題の多発など、ソ連東欧社会主義体制の崩壊、解体の事実は残念

#### (7) 総会の定期

(8) 会員の近況報告、交流

(9) 治安維持法同盟等との協力

#### 協同

#### (10) 役員体制の強化

以上、今日、自衛隊の海外派兵、小選挙区制、憲法改悪の動きが有るとき、

この反動攻勢に打勝つため会員相互が協力し、奮闘することが大切です。

以上

体制の崩壊、中国、キューバ、ベトナムの体制をどうみるかということもある。三〇年来日本共産党は社会主義特にソ連の大国民主義霸権主義を批判してきた。創成期社会主義論—試行錯誤。現存社会主義体制の崩壊であって社会主義そのものの解体ではないという見解である。「運動」—戦前・戦後を通じての日本の運動、民主主義、平和、戦争反対、生活向上をめざす運動の展開、それぞれの時代・時期における人民・民衆の苦難を解決するための運動—そこに社会主義があるという見解。「学説」—資本主義の矛盾（生産の社会化と私的所有の矛盾）をなくし搾取を廃絶する理論。社会発展の理論—史的唯物論の有効性。社会主義本来の立場は①生産手段の社会化による経済の発展、生活向上の保証（搾取の廃止）②民主主義の実現—政治的市民的自由③民族の自由、自主④現存核兵器の廃絶—人類への核脅威をなくす。社会主義体制の崩壊は資本主義の勝利とはいぬ。資本主義社会の矛盾を解決していくためには、社会主義への展望が不可欠である。

今日の社会主義については右のように論じられており、私も同感

であるが、なお、次のような思想を持っている①近代日本—「明治社会主義」いらいの社会主義運動の歴史。一九〇一年（明治三四）日本最初の社会民主党が成立したが（即日禁止）その宣言「如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは實に二十世紀に於けるの大問題なりとす」とある。社会主義という理想が民衆諸運動の軸となっていたこと。②とくに一九一七年のロシヤ革命の成功、社会主義国の出現は、社会主義の現実化として、「輝ける星」として日本の労働者階級、農民、知識層、民衆に大きな希望を与えた。③第二次世界大戦後の東欧、中国、ベトナム、キューバなどの社会主義諸国の成立は、資本主義から社会主義へ、が二十世紀世界史の発展方向であるとする認識が大きく支持された。体制、運動、学説と分けて考えればよいということですまされない混迷が私にはある。

岩井忠熊氏 ソ連—東欧の社会主義体制の解体の問題については、専門家の意見を聞く必要がある、ただ個人的な意見として、一九六四年、モスクワなどでは、社会主義が勝ったと、いつまで言えるのかと思う。

過ごした経験から思うのだが、當時から官僚主義のバカバカしさ—非能率—が目について仕方なかつた。社会主義だからといえる積極的事実も体験した。当時、ソ連は凶作でアメリカから緊急に小麦を輸入したが、パンの値段はものすごく安く抑えられ、レストランなどではパンは無料であった。モスクワの網の目のような地下鉄は十五カペイクでべらぼうに安い。これらは資本主義では出来ぬことだ。民族問題については、アルメニアに行った時、航空機は座席指定はなく民族差別がないという印象を持った。ただ、モルダビア共和国を訪ねたが、ここはルーマニア、トルコ、シルバニア、マジヤー、ユーハなどの社会主義諸国の中は、資本主義から社会主義へ、が二十世紀世界史の発展方向であるとする認識が大きく支持された。体制、運動、学説と分けて考えればよいということですまされない

三つある大学では一般教育の講義はルーマニア語で、専門学科の講義はそれぞれの言語で行なわれていた。逆にグルジアでは当時はロシア語で行なわれていて、それが不思議とも思われていなかったのは、逆に大きな問題をかかえると思った。最近イタリア、ローマに行つたが、夜は外出して歩けない位治安不安な状況であった。ドイツ統一後の様子をみてどう問題が解決されるのか、と思う。資本主義が勝ったと、いつまで言えるのかと思う。

村中嘉明氏 現在は反革命の時代ではないか。『今日のソ連邦』は廃刊になつたが、最近の誌面は如何にもアメリカに遠慮している。ソ連とアメリカとの関係では、かつてスターリンはナチス・ドイツと妥協したが、今日ゴルバチョフはアメリカとの妥協に腐心していると思う。半導体など先端技術での社会主義国の遅れが目立つてゐる。しかし私は社会主義は亡びる代ではない。レニングラードも改名しないだろうし、最後は踏み止まると思っている。

城 ゆきさん こういう情勢の変化に直面して、勉強せんといかんナと思つています。

秋田清二郎氏 六七一年も前、鐘紡の労働組合のグループを「指導」した。「雀の涙ほどの安い賃金」ということを云つていたが、朝五時の汽笛で起きて働く労働者の実際の生活は知らなかつた。工場労働者の実態を知らず

に、マルクス、レーニンの本を読んでいたわけです。千年的歴史をもつヨーロッパ、数十年に及ぶヨーロッパの革命、さまざまの努力はあったが、人間そのものの考え方は、変化していないと思う。

**西村幸雄氏** 社会主義は解体されたとは思わない。本来の社会主義のためには、民主主義が根本にえられねばならぬ。戦後の労働組合運動のなかで体験したことだが、組合幹部が権力をもってはいけぬ、組合費を幹部のせい沢な行動に使う腐敗をみたことが少なからずあった。組合活動が民主的体制をとっていない。産別会議の解体も一つはそこに原因をみることができる。そういうことが社会主義国家にあるのではないかと思う。官僚主義、膨大な軍事力保持など、世界的条件を考えても問題とされよう。また私事であるが、私の兄弟がシベリヤ抑留時代ひどい目に遭っているが、社会主義国として理解できぬ。中国に関しては、かつて毛沢東の矛盾論はすばらしいと思っていた。大事なのは、社会主義国家の権力を行使する主体が、非民主的―国民が批判できないで、自由と基本的人権

浅川亨氏 中ソ論争の最中、自力更生のスローガンがいっぱいであった中国に行つた。論争をもちかけても相手にならず、私らは何も言わない状況であった。昨年にも四回目の中国行だったが、トイレのきたなくなっているのに驚いた。民衆の状況も変化しているし、ひったくりなどもみられた。ヨーロッパに旅行しても、各

障されていない、プロレタリア民主主義が貫徹していないことだと思つ。中国、ベトナムでも官僚主義が横行し、これまでの社会主義の理論で、あるべからざる状況が生れていた。あるいは逆説的にいえば、社会主義体制のもとでしか出来ないことをしてきたと思う。日本の場合、労働組合が崩壊した。炭労、教組など闘う労働組合がなくなってしまった。労働組合が憲法九条をかえろという有様だ。非民主的幹部横行、幹部の堕落といえる。私も加わった「立命館民主主義」はフランスにもないやり方であったと思っている。今日の社会主義については、何よりも権力の行使をいかに民主的にさせかということであろう。それには民衆の力が發揮されねばならぬ。

**藤谷俊雄氏** 日本の現実は資本主義として、危機的だと思う。バルブ経済は資本主義の基本的な点での問題を示している。法律無視、リクルート事件、そこから全然改められていない。ソ連東欧の問題——これまで社会主義体制の問題としてみてきたが、歴史の問題として、ソ連・東欧の一〇〇〇年の歴史の中に位置づけてみる必要を痛感している。ソ連の官僚主義の問題も、ロシアの資本主義以降の歴史、さらに封建社会の歴史との関係でみることが必要である。ロシア東欧の諸民族の全史の中で今日の問題をみていくことが大切だと思う。

**枝浪松太郎氏** 今日の労働運動の状況は慨嘆にたえぬ。労働組合などといわいでほしい。闘わないと労働組合になつていて。労働組合は何よりも経済闘争を第一とするものと、自分の体験から考へている。



羽原正一氏 年は年ですし(八九才)、情勢の三分の一はわからぬ。ただ感じていることは、ロシア革命後、レーニンの下で社会主義建設が始められたが、ロシアは

## 京都の「戦闘的無神論者同盟」について

### 五辻英一郎氏よりの聞書

戦前日本で一九三〇年代は「プロレタリア文化運動」がもつとも多様な形で展開された。一九三一(昭和六)年、「日本プロレタリア文化連盟」(「コップ」)が結成されたが、その加盟十一団体中に「戦闘的無神論者同盟」もあげられている。「日本労働年鑑・昭和七年」(大原社会問題研究所発行、昭和七年版は(一九三二)昭和六年の現状を示す)には、「日本戦闘的無神論者同盟」について、つきのように記述している(七四三一七四五ページ)。「本年我国プロレタリア運動の陣営内に、宗教打倒の運動が現はれた。無産大衆にとって、緊急且つ重要なであったこの宗教運動は短時日の間に大衆の圧倒的支持を受け、直ちに広汎な領域に拡大されて行った」として、つきの解説が加えられている。一九三一年(昭和六)四月中旬より秋田雨雀、川内唯彦を中心に「反宗教闘争同盟準備会」が生れ、暫定規約発表、機関紙「反宗教闘争」を刊行、五月宗教撲滅演説会を東京上野で開き、八月中旬に夏季巡回宣伝を行ない、京阪神、

長野、山梨、新潟に講演会開催、和歌山、京都、大阪に支部を設置した。

「準備会成立後三、四ヶ月の間に、同盟員二〇〇〇名を獲得することが出来た」。九月創立大会を開催しようとしたが解散させられたが、「日本戦闘的無神論者同盟」と改称して、さらに同様の昭和八年版、九年版、昭和十年版によると、七年以降の引続き政府警察の「弾圧一掃的検挙」によつて、「コップ」加盟団体は大会も開けず、合法的活動が閉されて、昭和九年には、「戦無」(「戦闘的無神論者同盟」の略称)は勿論各団体は壊滅的状態に陥り、解散消滅させられた。

特高資料「社会運動の状況」昭和六年版には、「戦無」の神奈川、兵庫、愛知、高知、長野、長崎、京都、大阪に昭和六年中に(大阪は七年)支部又は支部準備会がつくられていること、「京都支部準備会」が「労働者学生約十名」によって昭和六年七月十五日に夏季巡回宣伝を行ない、京阪神、

岡村信太郎、出野武三、事務所所在地数十三「創立昭和七年五月二十日」、「中心人物山地豊邦、出野武藏」、「昭和七年中主タル活動、孟蘭盆闘争ニュース」等開催ス」である。同上八年版では「戦無京都支部、所属員數七、創立昭和七年五月、昭和八年中ニ於ケル重ナル活動、表面特別ノ活動ナシ、中心人物仁保芳男、出野武藏」となっている。「社会問題資料研究会編、社会問題資料叢書」(東洋文化社刊)中の「昭和七年社会運動情勢」によつて、作成された「京都のプロレタリア文化団体」では、「日本戦闘的無神論者同盟、昭和七年五月一日創立、会員一二、代表者山地豊

邦、役員五辻英一郎、長谷川正之助、岡村信太郎、出野武三、事務所所在地上京区大将軍鷹司町二五ノ一」となっている(湯浅貞夫「目でみる京都の民主運動史」六〇ページ)。

これらの諸資料については充分検討しなければならぬが、一九三一、三年(昭和六、七)に「戦無」京都支部がつくられ活動したことがわかる。この「戦無」に加つておられ、また戦後は民主商工会の運動をすすめられ、昭和四七(一九七二)年より五年間日本共産党所属の京都府会議員として活動された五辻英一郎氏に、「戦無」を中心としたご体験をお話しいただいた(おくだ)。

## 京都の「戦無」活動について

五 辻 英 一 郎

\*

\*

「戦無」が中央でどう組織された。私は一九〇八(明治四二)年生いたのかは知りませんが、私が同盟に名をつらねるようになつたのは、子供の頃、親のすすめでキリスト教会の日曜学校に通つたといふ体験もあって、のちにお話ししますように、岡崎教会の若い谷山辰夫牧師とのつながりといえま

高小を出て、大阪の織維問屋に店員としてつとめましたが、「おうたいどろぼう」といわれた商人はイヤで、自分の腕で働く職人になろうと思って、叔母がいたことから京都に出て、铸物工場につけました。一九二四(大正十三)年のことです。工業学校に入学したいと思っていたが病気で果たせず、きつい铸物の仕事より、木型職人になろうと思って、十七才のとき大阪に帰り、木型見習の三年二ヶ月の年期があけるまで木型工場でつとめました。昭和三年(一九二八)年の兵隊検査は乙種合格でしたから、兵隊にはいかずにつみました。検査のあと、木型職人として再度京都に来て、あちこちの工場でつとめました。「戦無」同盟に加わる前後は、岡崎円勝寺町の木型工場に勤めていましたが主人の毛利武三郎は、特高の探索來訪にも、五辻は思想はともかくも、うちには無くてはならぬ職人だといつて、しばしば庇ってくれました。戦時中、毛利さんは京都木型統制組合の理事長をしました。

私の母親は一八八三(明治十六)年、大阪堺の生れです。母の父(私の祖父)は油商などを営んでいましたが、明治二〇年(一八

頃、商売不振の中で死去しています。堺でお世話をなったお医者さんは、大阪で病院を開くとともに、島ノ内教会もつくった人でしたので、母も教会の影響もうけ、さきにいいましたように、この島ノ内教会の日曜学校に私に通わせたわけです。そんなことから、私も京都に来た頃、昭和三年の暮か四年のはじめに、洛東教会で丹羽牧師により洗礼を受けました。

翌年丹羽牧師のあとをついだ洛東教会の谷山牧師は、同志社中学から青山学院を出た人で、現在おられると八八〇八九才の方ですが、同志社大学の中島重先生の影響を受けておられた人です。中島先生は「社会的基督教」を主張され、一九二九(昭和四)年五月、学園運営に関する問題で同志社を辞職されたが、「基督者学生運動」を指導され、また一九三一(昭和六年)、「社会的基督教徒関西連盟」を結成、委員長として活動されました(注)この部分については、「同志社百年史」通史編、第四部戦時教運動によった。SCM(Social Christian Movement)研究会より五辻氏のもとに、「百年史」の

一頃、商売不振の中で死去しています。堺でお世話をなったお医者さんは、大阪で病院を開くとともに、島ノ内教会もつくった人でしたので、母も教会の影響もうけ、さきにいいましたように、この島ノ内教会の日曜学校に私に通わせたわけです。そんなことから、私も京都に来た頃、昭和三年の暮か四年のはじめに、洛東教会で丹羽牧師により洗礼を受けました。

この部分が一九八〇一二月二五日付けで送付されており拝見した)。

私は木型職人であり、労働者であるが、勉強しようと思い、二条川端にあった日本労働総同盟の労働学校に一年ほど通いました。週一回、夜間の講座であったようになります。中島重先生も講師として思想史の講義をされていました。生徒は一〇人位であったよう

に思います。そしてこの労働学校

とは別に、YMCAのなかに社会

科学の勉強会があるからこないか

と末包俊夫主事(YMCA)から、誘われて参加するようになり

ました。丁度その頃(昭和五、六

年の頃)木型工場の仕事もヒマで

したので、出て行けたわけです。

この研究会は宗教関係の人ばかりで、キリスト教会のほか、仏教関係の人、童大や大谷の坊さんもきていました。みんなペンネームで、あつたから、今、その人達の名前は知りません。しかもみな同志社を主体にする学生グループで、労働者は私ひとりでした。多い時は一〇人ぐらい、大体五、六人位の参加だったと思います。そこで

は、宗教とは何かとか、寺の人は

葬式の司会はかなわんとかの意見

が出されていました。そのうち労

働学校の方には、いかなくなりま

した。それには労働総同盟の指導

者のなかには私生活に納得できぬ

ところがあったので、学生グル

ープのこの研究会に傾斜していった

のです。多少学問や学生に憧れも

あつたからでしょう。

学生グループの研究会に加って

いる時に、同志社「神棚事件」が

起きました。これは、一九三五

(昭和一〇)年の岩倉の同志社高

商校での「神棚事件」ではありま

せん。キリスト教学を主張する神

棚設置反対運動の支援に、さきの

YMCA主事から、君は学生でな

いし処分されることはないから、

ビラまきをやってくれと頼まれま

した。羽織、袴をつけて、ビラま

きを二、三度やりました。(注)

の学生グループはSCM——基督

者学生運動Student Christian

Movementであると思われる。

一九三一年(昭和六)頃には、「SCM

京都支部と左翼運動との共同戦線

が学生たちの間で結成され「同志

社百年史」通史編、一〇八七ペー

ジ」とあるように、この頃「戦

無」も組織されたと思われる)。

SCMは一〇人位いたように思

います。同志社の学生がほとんど

で、岡谷元治、和田洋一、武田好一、西川、神谷などの人々もそのメンバーであったと思ひます。立命館の学生はいなかつたようでした。SCMに加つたとき、末包主事(YMC)は私をOBとして紹介してくれました。そしてSCMの活動と「戦無」の活動は重さなりあつていましたが、「戦無」は、山地豊邦(代表)、五辻英一郎、長谷川正之助、岡村信太郎、出野武三の五名が届出のメンバーとなりました。大将軍で家を借り、そこで研究会などを行ないましたが、これは合法の集まりで、集会の度毎警察に届け出ました。もちろん非合法の集まりももち、使い分けをしました。こんなこともありますました。洛東教会の横にアメリカ人宣教師の住宅がありましたが、ある夏(多分昭和六年の)宣教師の軽井沢への避暑中、メイドさんに頼んで、コンサートをやりたいとして応接間で、ピクター十二時版のレコードでバッハとかモーツアルトをかけてカモフラージュしながら、五、六人で議論をしたことがありました。宗教の起源は何か、どうを話し合いました。

こうしたSCMと「戦無」の活動は、二年間ほど続いたと思います。一九三一（昭和六年）六月「中村震太郎事件」、九月以降の「満州事変」の進行のなかで、平和のための行動が求められました。いまエスがいたら、その先頭に立つにちがいない、キリストの神の国運動だという意識がありました。しかし、私がSCMから「戦無」の方に傾いていったのは、一つは、洗礼を受けた時から「復活」は物語として理解するが、事実としては信じられなかつたし、「あかし」はわかるが、祈りには疑問を持つていました。二つは、マルクス主義、「空想より科学へ」など一を学ぶなかでのことです。中島重先生に教わったことは無駄ではなかつたが、科学的社会主义の方へかわっていったわけです。SCMは「戦無」に集つて、本当の洗礼をうけた、正しいキリスト教を求めることが出来たと話しました。戦争に追随する教会はダメだとも話していました。

ＳＣＭ「戦無」は自然消滅しました。私は円勝寺の工場近くに、部屋を借りて住んでいましたが、月に二、三度一人づれの特高（中立売と川端警察署）が、夜中十一時、十二時頃来て明方まで、もう年貢をおさめる時だとか、おどし文句をいって帰るということがありました。また警察署につれていって、今夜はブタ箱は一杯だからマア帰したるなどとしたこともあります。その家のおばさんは「またうるさいのが来てたなあ」などとなぐさめてくれました。一九三一（昭和六）年から翌三二（昭和七）年に至る頃ですが、私自身も仕事が忙しくなって、行動と共にすることが出来なくなりました。

二十四、五才の頃で、逮捕されたことはありませんが、警察特高に追いまわされる生活でした。勤先の木型工場の主人毛利氏は、今の間に、根性をいれて仕事にはげめといい、また職場で自由に自分の裁量で仕事をすすめさせてくれました。一九三三（昭和八）年正月ごろから連絡もとだえ、「物」（機関紙など）もこなくなつたので、仕事に集中することになりました。

た。一九三四（昭和九）年に結婚して、昭和十年、元

○「燎原」八一号をお届けします。  
「ソ連保守派がクーデター、ゴルバ  
チヨフ大統領は失脚、非常事態宣  
言」と、今朝（八月二〇日）の朝・  
毎紙が伝えています。混迷がいよいよ  
深まって来た思いです。「社会主義」  
を正しく捉えることが、益々求められ  
ます。

○四六回目の「終戦」の日を迎えまし  
た。PKO自衛隊派遣、小選挙区  
制、そして底知れぬ証券金融腐敗不正  
統発、憲法、民主主義破壊の強行が目  
に余ります。国民・民衆が鬪った戦後  
民主運動史の事実がもっと語られる必  
要があります。会員の皆さんのご投稿  
をお願いします。

○編集部担当の奥田修三（宇治市広野  
町寺山一七一五七）、湯浅貞夫（京  
都府船井郡日吉町保野田）の両名のい  
ずれかにご連絡下さい。

住み、昭和十三年に、御前通六角の地に独立して、工場と住いを定めました。